

関西蔵前午餐会5月例会

シーボルトはスパイだったのか ーシーボルト事件を中心にー

平成29年5月9日

田村 洋一

シーボルト来日当時のオランダの状況

- ・18世紀末、ナポレオンによりオランダは征服され、オランダ国王ウィレム5世はイギリスに亡命。インドネシアのオランダ領はイギリスの支配下になる。長崎出島はイギリス傘下にはいることを拒否。
- ・ナポレオン亡き後のウィーン会議(1814~15)で、ベルギーをオランダに併合し、ネーデルランド王国として認められた。
- ・アフリカとインドのオランダ植民地と交換することで、インドネシアの植民地権をオランダは回復した。
- ・戦争とそれに続く亡国状態にあった国家財政の立て直しのために東アジアでの貿易事業の再興が急務であった。そのため東アジア諸国の調査を行い、そのための基礎資料の作成を行っていた。
- ・特に日本に対しては医術の伝授が歓迎され、医師は他の職員より多くの自由が許されることも洞察していた。そこで医術の伝授と科学的調査の両面でシーボルトが適任者として選定された。医師の俸給以外に、特別調査費が支給された。

シーボルトの肖像画

川原慶賀筆

キヨソネ筆



シーボルトの学生時代

- ・1796年ドイツ・バイエルン王国のヴュルツブルク(ロマンチック街道の北端)で誕生した。
- ・本名:フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト 名門の出で、親族に医学教授や医者が多い。
- ・ヴュルツブルクの古典ギムナジウム(高等学校)を優秀な成績で卒業し、ヴュルツブルク大学 医学部(有名で難関)に入学。医学の他に動物学、植物学、地理学、民俗学なども学ぶ。
- ・父親の友人で生理学・解剖学の教授をしていたデリンゲル教授の家に1年半下宿し、ここで実践に即した教えを受ける。
- ・医学部を卒業し、外科・内科・産科の博士号を得た。
- ・その直後に開業したが、2年足らずで病院を閉じた。
- ・叔父の紹介で、オランダ領東インド **陸軍外科少佐**に任命され、バタビア(現ジャカルタ)に赴任することになった。

ヴェルツブルク ク的位置

- ・ロマンチック街道(ヴェルツブルク~フュッセン)の北端。
- ・バイエルン州
- ・レジデンツは世界遺産に登録されている(1981)
- ・フランケン・ワイン(白)の集積地



特別の任務を帯びて日本へ

- ・シーボルトは東インド陸軍外科軍医少佐として赴任。軍務経験なし2年の開業医の経歴者としては、極めて異例であった。
- ・バタビアのオランダ領総督・カペレン男爵は、日本での調査の責任者であった。シーボルトに「日本における学術調査の使命を帯びた外科少佐ドクトルフォン・シーボルト」という公式肩書を与えた
- ・カペレンはシーボルトに、従来の医師の派遣と異なる特別な任務については、それに要する費用は特別に総督府の負担とすることならびに収集した資料・標本の所有権はオランダ政府にあるという契約を結んだ。
- ・バタビアでシーボルトは必要な物資の調達に奔走。日本人の度肝を抜くような発電機械、空気ポンプ、ピアノなど購入。医療器具も
- ・1823年(文政6)8月11日長崎に到着。言葉からシーボルトの祖国が怪しまれたが、無事入国した。

出島での暮らし(1)

- ・シーボルトは、日本の鎖国の実情を知り、調査活動の難しさをバタビアの総督に手紙で知らせた。しかし方法はあるので、予算をつけてくれと頼んでいる。
- ・帰国を控えた商館長の紹介で、通詞や長崎に住んでいた日本人医師と出会った。その後の彼の活動の手助けとなる
- ・着任早々、ジャカルタから持参した牛種痘で天然痘の予防接種をした。失敗だったが、「出島には天然痘の予防接種を行った医者がある」と評判になり、出島への出入り許可をもとめる者が多数、長崎奉行所に殺到した。
- ・長崎に勉強に来ていた医師湊長安、美馬順三などがシーボルトの第一の門人となる。シーボルトが最先端の医学を教えることが知れると、多くの医師や蘭学者が出島を訪れるようになる。
- ・シーボルトの薬草採取や病人診療などで外出が認められるようになる

出島での暮らし(2)

- ・来日した年の10月、商館長ブロンホフが「くんち」見物に連れ出し、その後丸山で食事したが、この時初めてタキ(滝)に出会った。足田屋の遊女其扇になったばかりで、シーボルトが最初の客だった。タキはこの時16歳。シーボルトの叔父宛の手紙で「私は日本女性を伴侶としました。とても気立ての良い女性です」と書き送っている
- ・翌1824年3月、長崎奉行は、吉雄塾や櫛林塾でのシーボルトの出張講義や病人の診察を許可。この塾には、若い医師、蘭学者、病人で溢れていたという。
- ・8月シーボルトの日本における特別調査費を認める書面が届く。商館長はあらゆる援助をするようにという指示も来る。
- ・長崎奉行はシーボルトに長崎の街で私塾を開く許可を与えた。幕府も、長崎奉行の「病人を診てもらい、新しい医学情報を得る」という利点に納得した。場所は鳴滝谷近くで、当時は町のはずれ。

鳴滝塾跡

シーボルト記念館の手前 幕末トラベラーズ／地図と写真で見る幕末の史跡HPより



シーボルト記念館

長崎市制施行100年を記念して、かつての鳴滝塾跡の隣接地に設置。



鳴滝塾とシーボルト(1)

- ・鳴滝塾は、ヨーロッパ人が作った最初の私塾である。シーボルトは週1回この塾に通った。そこに塾頭が住み込み、塾生達は通詞の家に寄宿した。最初の塾頭は阿波出身の美馬順三で次が高良斎
- ・当初シーボルトは、主として医学理論と臨床に博物学を教え、後に薬理学を追加した。臨床実習も積極的に取り入れた。手術を行う場合は、奉行所の許可を得て、塾生立ち合いの下で執刀した。
- ・シーボルトが来られないときは、塾頭などが門人を指導した。
- ・塾生の数は定かでないが、150名を超え、50名から60名が常に塾生だったようである。大半は九州地区出身であったが、出雲や陸奥から来た者もいた。
- ・高野長英(陸奥水沢に人)は養父にあてた手紙で、「江戸での1年の勉学はほんの畳の上の水練、長崎での勉学はわずか半年でも実践と同じ」と書き送り、鳴滝塾の有効性に言及。

鳴滝塾とシーボルト(2)

- ・「人工瞳孔形成手術により、10年も盲目だった日本の著名人の目が見えるようになり、私の名は日本中に知れ渡った。事実、私の許には数多くの優秀な医師、蘭学者が集まり、さながら大学のアカデミーのようになった」とシーボルトは記している。
- ・シーボルトの許から近代医学に貢献した人材が何人も育った。
 - 伊東玄朴：江戸で開業後、佐賀藩に仕える。後將軍家定の脚気を治し、幕府の医官となる。
 - 石井宗謙：岡山で開業した後徳川家侍医。娘いねを指導
 - 伊藤圭介：植物学者。後に東京帝国大学理学部教授
 - 高野長英：塾の中心的メンバー。「蛮社の獄」で捕えられる
 - 高良斎：鳴滝塾頭。蘭語論文を多数提出。後明石候に仕える。
 - 湊長安：江戸で開業。青山候に仕える。
 - 美馬順三：鳴滝塾頭。江戸参府を前にしてコレラで死亡

鳴滝塾とシーボルト(3)

- ・鳴滝塾は、日本人にとっては「蘭学センター」であったが、シーボルトにとっては日本調査の研究機関の中心であった。
- ・門人たちはシーボルトが指示した各分野(日本の政治、風俗、習慣、産業など)毎のテーマについてオランダ語でレポートを提出。シーボルトは添削し、質問をつけて門人に返した。もちろんシーボルトは近代医学を門人に熱心に教えた。そのために門人が熱心にレポートを提出することを判っていたからである。レポート例:

日本疾病誌

高良斎

日本及び中国医薬について

高野長英

日本における茶樹の栽培と茶の製法

高野長英

鯨及び捕鯨について

高野長英

日本貨幣に関する考察

鈴木周一

日本の時の唱え方について

吉雄権之助

日本古代史考(神話学含天皇制)

美馬順三

鳴滝塾とシーボルト(4)

- ・シーボルトは病人の治療代を一切受け取らず、患者は、感謝の気持ちとして美術品、工芸品、薬草などを置いていくようになった。
- ・日本人の贈答の習慣を見て、自分のコレクションを系統的に集めることを思いつく。だが貧しい人からは一切何も受け取らず。
- ・大名の側室も診察を受けるためにシーボルトを訪れる。やがて行われる江戸参府のために、大名との関係もフルに活用した。自分が世話した大名から、さらに役立ちそうな大名を紹介してもらった。
- ・長崎奉行高橋越前守(元松前奉行)から北方の情報を得ようと考えた。また奉行はシーボルトの近代医学の知識を広めたいと思っていた。当時天然痘で流行っていたからである。両者の思惑が一致し、奉行は以前部下であった北方探検家最上徳内を紹介した。
- ・江戸参府に備えて、下関、大坂、京都など参府経由地と江戸で会いたい人々をリストアップし、奉行らの紹介をもらって面会の約束を取り付けた。

江戸参府旅行(1)

- ・1826年(文政9)2月長崎出発。商館長スチュルレル、医師シーボルト、助手ビュルガーの3人。門人二宮敬作、高良斎、石井宗謙、絵師川原慶賀がシーボルトに同行。高野長英、湊長安はすでに出立
- ・長崎→小倉:陸路 小倉→大坂:海路 大坂→江戸:陸路(東海道)
- ・旅行中に面会した者から受け取った資料は宿に残して後で門人が出島に送るか、シーボルトが帰りに引き取る手筈。多くの資料収集
- ・関門海峡を渡る時、丹念に測量、水深も測り、海図を製作した
- ・1週間におよんだ下関滞在は、高野長英や湊長安らと情報交換する機会でもあった。長安は大坂、京都、江戸で会うべき人間のリストを作成していた。長英はシーボルトが見ることのできない地方の情報をまとめていた。また門人の論文整理にもあたった。
- ・他の門人たちがレポートを持って集まる。門人達には次のテーマを与え、長崎鳴滝塾に送るように指示。

江戸参府旅行(2)

- ・大坂で『薬品応手録』が完成していた。新しい薬の作り方を高良斎が翻訳し、版本にした。各地で訪れる医師に渡すため。
- ・矢作橋(岡崎の手前)には、この他興味を示し、図面を作成し、25分の1の模型まで作らせている。
- ・大森近くで島津重豪(将軍の岳父)とその息子で中津藩に養子に入った奥平昌高が出迎えてくれた。品川に桂川甫周、宇田川榕庵らが出迎える。定宿の長崎屋に投宿。多数の面会人が訪れる。
- ・将軍御典医桂川甫周が宿を訪問。江戸長期逗留を相談。感触良
- ・最上徳内が訪問。徳内・間宮林蔵は元高橋重賢(当時長崎奉行)の部下。徳内から樺太の情報(間宮海峡)を得る。
- ・後日徳内は林蔵をつれて長崎屋に来る。シーボルトとの会話からシーボルトが北方や樺太の情報を欲していることを察知し、危険人物と見做す。林蔵は当時隠密であった。

江戸参府旅行(3)

- ・天文方兼書物奉行高橋景保が訪問。シーボルトは単刀直入に伊能忠敬作成の「日本地図」を要求。景保困惑する。
- ・何回の会合の後、禁制品の伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」や「江戸御城内住居之図」などを要求し、その代わりにクルーゼンシュテルンの『世界周航記』(北方でのロシアの動向を知りたかった)「蘭領印度の地図」と交換することで合意。
- ・高橋景保の案内で、シーボルトは紅葉山文庫を見学し、北方領土の地図を見ている。
- ・将軍典医土生(はぶ)玄碩が開瞳薬(白内障手術に用いる)の調合をしつこく聞くので教える。礼として葵紋付の帷子を贈る。
- ・シーボルトは葛飾北斎に直接会って絵画の依頼もした。
- ・将軍謁見は、ほんの数分で終わり、商館長もシーボルトも将軍の顔を見ていない。その後、将軍世子に挨拶する習わしだが、不在。朝6時に宿を出て、帰った夜の9時。

江戸参府旅行(4)

- ・江戸での40日間の滞在を終えて、江戸を出発したのは5月18日。
- ・品川に、島津重豪、奥平昌高がわざわざ別れを告げに来た。
- ・最上徳内は小田原まで同行した。小田原の宿で徳内は自分のコレクションの9割近くをシーボルトに渡し、帰国後発表して欲しいと。
- ・江戸からの復路、京都では天皇のことを調査し、大坂では大坂城の絵図を入手し、瀬戸内海では海図作成のための再測量を行い自ら海図に書き込む。往路で集めたコレクションの集荷も行った。
- ・オランダとしては、日本が開国した場合、天皇と将軍の位置関係がどうなるか知りたかったのであろう。
- ・「大坂城之図」や大阪の克明な市街地図によると、シーボルトは、開国の際に大坂が長崎に代わる港として考えていたようである。
- ・川原慶賀に船のスケッチをさせ、これをもとに、出島で船の模型を作らせた。軍用船、大名船、番船、商船、漁船などの25分の1の模型。軍用船、大名船は精巧に造らせた。

シーボルト事件前(1)

- ・1827年(文政10)2月、シーボルトは高橋景保に日本地図の催促
- ・景保は蝦夷、樺太、琉球まで含めた日本地図をシーボルトに送る
- ・シーボルトはオランダに送る時、事故でもあると困るのでもう1枚作成してほしいと要求する。景保はシーボルトから入手したい物がまだあるので、要求をのむ。しかし部下に対する配慮が足りず。「シーボルト事件の発覚の一端がここにもあった。」
- ・この頃シーボルトは幕府と長崎奉行の不穏な動き気付き、通詞目付吉雄忠次郎を通して情報入手し、対処した。吉雄は通詞目付としてシーボルトの監視の任務もあった。
- ・江戸に行く大通詞吉雄権之助に、高橋景保にプラネタリウムなどを届けるように頼む。その中に間宮林蔵あての小包があり、景保は林蔵に届ける。林蔵は中身を確認せずに**勘定奉行村垣淡路守**に届けた。内容はさしたるものではなかったが、勘定奉行はシーボルトの動きを疑い始める。

シーボルト事件前(2)

- ・1826年(文政9)10月、美術工芸品、絵画、民芸品、動物標本などのシーボルトコレクションはバタビヤに送られた。
- ・1827年(文政10)7月、蘭印政庁はシーボルトの帰国を決定する。
- ・その結果、主な門人は、去る者(岡研介、高野長英など)と尚シーボルトと共にする者(二宮敬作・高良斎など)に分かれる。
- ・高野長英は「先生の来日の目的、医師以外の肩書は何ですか？」と尋ねる。シーボルトは答えをはぐらかしていたが、あまりの追及に「機密調査官」と答える。長英は早速荷物をまとめて塾を後にした。
- ・岡研介の帰京の際に下関の熊谷義比(よしかず)にピアノなど託す
- ・二宮敬作、高良斎らは毎日コレクションの積み込みに忙しい。禁制の品を見ても、見ぬふりをして協力する。
- ・この頃、通詞目付吉雄忠次郎は長崎奉行から「シーボルトの監視を強めろ」という指示があった。しかし忠次郎は学者としてのシーボルトに傾倒してしまい、役目がおろそかになる。

シーボルト事件(1)

- ・1828年(文政11)9月大型台風が来る。シーボルトコレクションを満載したハウトマン号が岸から離れた所で錨をおろして台風が過ぎるのを待っていた。強風を受けて湾内を漂っていた唐船に錨綱を切られ、ハウトマン号は座礁して動けなくなる。
- ・長崎奉行は入船とみなし、入港時に定められている臨検を開始。出港に際しては、積荷と人員の簡単なチェックだけ行われるのが慣例
- ・9月20日、積荷は長崎奉行の管轄下に置かれ、中身は徹底的に調査され、リストにされ江戸へ早馬で知らされた。
- ・江戸の老中達は、かねてから怪しいと睨んでいたが、禁制品の持ち出しがこれほどの規模だったとは思ってもよらなかった。
- ・高橋景保は縄をかけられ、和田倉門外竜の口の評定所で、容疑はシーボルトとの密交と知らされる。景保の家宅捜索を行い、証拠品を押収した。逮捕は部下にも及んだ。景保の部下は、2枚目の日本地図の複写を命じられた時、悩んだ末に勘定方に駆け込んだ。

シーボルト事件(2)

- ・高橋景保は、自分の部下が勘定方に密告したり、間宮林蔵、吉雄忠次郎らが幕府の手先となって働いていたことを知った。林蔵はまだしも忠次郎までが…と観念し、関係者の名を挙げた。
- ・江戸町奉行は、禁制品を取り戻すために、景保の協力者に手紙を書かせた。景保は「禁制品は取り戻し、奉行所に提出してほしい」という文面を大通詞末永と通詞目付吉雄忠次郎に書いた。
- ・封印されていた景保の押収品が江戸町奉行所に運ばれた。その点数の多さに幕府は驚く。江戸からの早馬が長崎奉行所に到着。
- ・長崎奉行は末永・吉雄の両名に、①シーボルトが所持しているはずの日本地図、樺太地図などの禁制品を取り戻すこと ②シーボルトがそれに応じなければ、奉行の力をもって没収することを伝える
- ・吉雄忠次郎は「発覚したのだから、禁制品を全て返すのが得策」と進言したが、シーボルトは強気で拒否した。
- ・シーボルトは画家と共に直ちに地図類の模写にとりかかった。

シーボルト事件(3)

- ・蝦夷図の模写がおわり、「『蝦夷図』は提出するが、他の地図はオランダ船で送ってしまったので何も残っていない」と奉行へ伝言。
- ・シーボルトは家宅捜査に備えて、日本地図などの重要品は箱に入れて、一部は商館長の金庫へ隠し、残りは出島植物園に飼われている猿の檻に隠した。
- ・12月16日早朝、奉行所役人が出島に出向き、商館長立ち合いのもとシーボルトが召喚され、家宅捜査を行うことを告げる。居宅や土蔵を調べ、禁制品の地図をはじめ絵図、書籍、刀剣など出てきたが、目指す日本地図は発見できなかった。
- ・奉行は再度役人を出島に派遣し、シーボルトに日本地図を出すよう迫る。最後は植物園で鉄製の箱を掘り出し、役人に渡す。しかしシーボルトの手元にはまだ2枚目の地図が残っていることを役人は知る由もない。

シーボルト事件(4)

- ・シーボルトを自宅に幽閉。役人や通詞の目を盗み、吉雄権之助が持ち帰った2枚目の日本地図の写しを続けた。
- ・1829年1月、「シーボルトを取り調べるため一時帰国を差し止める」という通達が、奉行所から商館長にあり。
- ・シーボルトは1日中奉行所で尋問を受けたが、まったく口を割ろうとしなかった。尋問と言っても、尋問事項が事前に文書で示されるので、答えを用意する時間は十分あった。
- ・尋問内容はシーボルトと高橋景保が交わした手紙に基いているが専門用語が多いこと、手紙には意味不明なところがあり、的を得た問いではなかった。質問する奉行側も通訳する通詞も勉強不足でシーボルトに翻弄されるばかりであった。シーボルトは難しい言葉新しい言葉を意図的に混合させていた。
- ・シーボルトは、のらりくらりと話をそらし、固有名詞、特に人の名を使わないように徹底的に気をつけた。

シーボルト事件(5)

- ・日本人妻其扇も呼び出されたが、「全く知らない」で通した。
- ・商館長の届け出に基づき、第3回目のシーボルト宅捜索が行われさらに多くの物がみつき、奉行は驚いて江戸に早馬を送った。押収された物は葵紋付帷子、九州などの地図であった。
- ・土生玄碩は典医の資格を剥奪された。
- ・3月20日高橋景保が獄死。刑が確定するまで、遺骸は塩漬けにされる。後に死罪と決定した時に首を刎ねられた。
- ・シーボルトに対する尋問は5ヶ月続いたが、新しい事実は出ず。
- ・景保の死が伝わると、シーボルトに対する尋問が日毎に形式化し、6月後半には、長崎奉行はシーボルトの監視を止める。
- ・シーボルトは門人を集めてコレクションの整理を再開する。
- ・1829年10月、長崎奉行より判決あり。品物は没収し、シーボルトの国外追放である。妻子のためにオランダ商館から砂糖を買った。娘いねの養育は二宮敬作や石井宗謙ら信頼できる門弟に托した。

シーボルト事件に対する考察(1)

- ・秦新二は『文政11年のスパイ合戦－検証・謎のシーボルト事件』で幕府のとった矛盾する行動を考察している。その内容を以下に
 - ・①幕府は2枚目の「日本地図」をシーボルトが持っていることを感じていながら見逃した。②景保から『江戸御城内御住居之図』がシーボルトに手渡されたことを知っていながら、全く追及していない。③最上徳内の所有する地図類の殆どが手渡されているのにふれていない。④シーボルトと間宮林蔵が会っていたこと隠していた。
- ・上記の意味することは、「**シーボルトを罪に陥れることではなく、別の人間を牽制する**」ことではなかったかと推測している。
- ・別の人間とは親蘭大名であり、中でも**薩摩藩の島津重豪**である。隠居しているとはいえ派手な振る舞いが多く、将軍家斉も困っていた家斉は岳父にあたる重豪を牽制するチャンスを狙っており、「シーボルト事件」の最大の目的がここにあったのではないか。

シーボルト事件に対する考察(2)

- ・幕府側の先兵となって働いたのが、間宮林蔵である。御庭番出身の勘定奉行村垣淡路守の部下であり、隠密であった。
- ・1824年(文政7)、シーボルトが鳴滝塾を要望した時、村垣はシーボルトを自由に泳がせるために、許可したのではないか。長崎奉行高橋は、村垣の北方での部下であった。
- ・シーボルトから林蔵の下に送られた小包は、村垣によって作為的に起こされた「シーボルト事件」の引き金に過ぎなかった。
- ・幕府は「シーボルト事件」によって、島津重豪の行動に大きな釘を指すことが出来た。その目的が達成されると、全てを高橋景保とシーボルトのせいにして、事件を闇の中に葬り去った。
- ・幕府に対して様々な要求をしていた重豪が、シーボルト事件が発覚した後は、ぱったり控えるようになった。また薩摩藩による、密貿易である唐物取引は行われなくなった。これが証明している。

薩摩藩の密貿易

- ・薩摩藩は重豪の時代、木曾川治水工事の出費や長女茂姫を将軍家斉に嫁すのに莫大な金を使ったりして、財政は破綻寸前だった。
- ・重豪は将軍の岳父の立場を利用し抜荷に精を出し、借金の穴埋めにつとめるが、誰も咎める者はいなかった。属国琉球を通じて中国製品を輸入する特権を有していたが、販路は薩摩藩のみ。
- ・1810年(文化7)に、特定の唐物を長崎で売りさばくことを認めさせた中国への輸出品のなかで重要な物は昆布で、その対価として中国から薬種を輸入した。中国内陸部で甲状腺の病気が流行っていた
- ・輸入した薬種は富山の薬売りが独占的に扱った。薩摩藩と富山藩の間に特別のルートが出来上がっていた。
- ・重豪は、オランダ商館長ともつながりを持つ。より利潤の高い商品の輸入・販売の許可を得るべく、娘茂姫や親しい老中に働きかけた幕府は重豪の要求に対して全面的に貿易を許可している。従って幕府の長崎貿易は崩壊寸前まで追い込まれる。

最後に

- ・日本では、シーボルトは名医としての面が強調されてきた。
- ・シーボルトは医師であり、博物学者であると同時に調査員でもあった。調査の中には軍事的・政治的な面も含まれており、スパイの要素があった。
- ・秦新二は、オランダと日本の資料を精査した結果、「シーボルトは医師・博物学者として、あまりに優秀であったために、「当時の幕府によって政治的に利用された」と結論している。
- ・勘定奉行が御庭番の家系であり、長崎奉行が元部下である関係からすると、シーボルト事件は、将軍家斉の意向が働いたのか？
- ・秦新二は、多くの資料研究を個人で行うことに限界を感じ、オランダに財団シーボルト・カウンスルを設立。ここでオランダの多くの学者の協力を得て調査を進めた。この時、新しい文書などが数多く発見されている。それに基づく推論である。

参考文献

1. 秦 新二『文政11年のスパイ合戦―検証・謎のシーボルト事件』文芸春秋 1996年
2. 福井英俊、宮坂正英、徳永宏『シーボルトのみたニッポン』シーボルト記念館1994年初版発行
3. 松井洋子『ケンペルとシーボルト 「鎖国」日本を語った異国人たち』日本史リブレット 山川出版 2010年
4. 志岐隆重『長崎出島四大事件 長崎奉行との緊迫の対決』長崎新聞社 2011年
5. 大場秀章『花の男 シーボルト』文芸新書215 2001年
6. KLMオランダ航空ウインドミル編集部編『日蘭交流の歴史を歩く』NTT出版 1994年

シーボルト関連年表 (・付は関連事項)

- 1789 年(寛政元) ・島津重豪の娘・茂姫(後広大院)、第 11 代将軍徳川家齊の正室に嫁す。
-橋家
- 1796 年(寛政 8) シーボルト、ヴェルツブルグ大学教授の長男として誕生。
- 1810 年(文化 7) ・ナポレオン、オランダをフランスの直轄領に。ウイレム5世はイギリスに亡命。→オランダ東インド植民地はイギリスが一時占領(1811~1816 年)。
- 1815 年(文化 12) ・ウイーン会議議定書が締結される。ネーデルランド連合王国が誕生。
シーボルト、ヴェルツブルグ大学へ、医学、植物学、地理学、民俗学などを勉強。
- 1821 年(文政 4) ・伊能忠敬没(1818 年)後『大日本沿海輿地全図』完成。高橋景保監督の下で実行される。
- 1822 年(文政 5) オランダ外科軍医少佐として、ジャワに向かう(26 歳)。
- 1823 年(文政 6) 8 月長崎に到着。10 月其扇(お瀧)が出島に通う。
- 1824 年(文政 7) 3 月吉雄塾や櫛林塾でのシーボルトの出張講義や病人診察を長崎奉行許可。9 月頃長崎郊外鳴滝に塾を開く
- 1825 年(文政 8) 4 月『薬品応手録』を執筆。弟子の高良齋が翻訳し、大坂で出版する(1826)。
- 1826 年(文政 9) 2 月江戸参府のため長崎を出発。下関滞在(2/22~3/3)。大阪滞在(3/14~16)。京都滞在(3/19~24)。4 月 10 日江戸に到着、大森で薩摩候、中津候が出迎え。

江戸滞在(4/11～5/17)。4/12 中津候来訪。4/16 最上徳内が来訪。4/17 最上徳内と間宮林蔵が来訪か。
4/18 高橋景保来訪。4/19 桂川甫周が来訪し、江戸長期滞在の見通しが明るいと伝える。4/25 土生玄碩ら
眼科医が来訪。4/29 景保来訪、『世界周航記』などと日本地図の交換を要求する。5/1 江戸城に登城し将軍
に拝謁。

5/18 江戸出発。6/2～6 京都滞在。6/8～13 大坂滞在。6/16～18 兵庫滞在。7/7 長崎出島に到着。

11/3 景保、地図の複製が終わったことをシーボルトに知らせる。

1827 年(文政 10) 6/15 景保から日本地図を受け取る。6/24 もう一枚の作図を依頼する→景保しぶしぶ受諾する。

7/20 シーボルトの帰国が決定

1828 年(文政 11) 2/25 景保に手紙を書き、間宮林蔵への手紙と小包の仲介を頼む。

9/17 長崎地方猛烈な暴風雨に襲われ、ハウトマン号が稲佐の浜に座礁。船中から禁制の品々が発見され、
押収される。

11/17 景保、部下と共に召し取られ、評定所で尋問を受ける。

1829 年(文政 12) 1/28 シーボルト国外に出ることを禁止される。10/22「国外退去及び再入国禁止」の処罰。12/30 出島を去る

1830 年(天保元) 7/7 オランダに到着 秋、ライデンに居を構える

1850 年(嘉永 3) 12/3 高野長英が自殺

蔵前-関西午餐会_月例講演メモ 『シーボルトはスパイだったか』

第703回 関西蔵前午餐会

H29-5-9

12時～14時50分

中央電気倶楽部（堂島）

出席 30名

5月度講演会

演題： 『シーボルトはスパイだったか』 …

講師： 田村洋一 氏 （S41 修 制御） 兵庫歴史研究会、元長崎総合科学大学・住友金属

【Ques. & Ans.】

Q1： オランダ政府は何を意図して、日本の探索をシーボルトに指示(託す)したか？。

Ans： 『日本』に関して系統的に調査・把握することで、(ヨーロッパ・東洋の中で) オランダの地位を築きたかったと思われる。

Q2： シーボルトから見て、間宮林蔵・塾の門人(40 数人)との関係は何か？

Ans： 各々・それぞれ(の対応・関係として)の意図・態度について、あれこれの文書で見ることができるが、
シーボルト本人が(どう考えていたかを)見定めることはできていない。(各々の人物・個性からみて)

Q3： 武田?家に高野長英からの文書がある、と聞いているが事実か？

Ans： 日本(国内)には各種のレポートが残っていない(オランダ語文書はライデンだけに残ると考える)

ライデン大学にはさまざま資料が残されている

Q4： (渡来人対応としての)『出島』(に相当する施設)が、(長崎以外に)堺 にもあったと聞くが？。

Ans： 承知していません(聞いていない)。 …

【講演の概要】 …午餐会 HP H29/5 『詳細』欄に記述

- ・シーボルトはドイツ生まれ(国籍)、医学を修めた後、オランダ政府からの日本の社会科学(資料他)を調査・報告するという密命を負って長崎出島に来日した。
- ・鳴滝塾生徒含めて、多くの蘭学・医学を伝授して 徳川幕府・日本社会に大きな貢献する一方で、日本の諸事情を調査・報告書を作った。いわゆる『スパイ』とは言えないが、報告と資料内容を作成・持ち帰りは『日本(江戸社会)から 欧州社会への偉大なスパイ』行為と言える。
- ・帰国船 ハウトマン号の事故で、ご禁制破りが長崎奉行に露見。江戸幕府/勘定奉行 (Top は将軍 家斉-村垣淡路守) との、虚々実々の調査・交渉(約1年)となった(結局、かなりの資料を持ち帰り)
- ・幕府側も 諸事情(シーボルトの社会貢献、徳川-島津の貿易抗争 など)から、『シーボルト事件』を

政策的に取り扱って、薩摩藩海外貿易の牽制・抑制に利用したと思われる。

- ・オランダ政府も、日本と東洋について多大の知識を得て、東洋での貿易覇権回復に役立てていると思われる。

秦新二 著 『文政 11 年のスパイ合戦…検証 謎のシーボルト事件』をベースに

当時の日欧 社会・政治・経済等の背景、社会情勢、関係者の行動と判断 を
オランダ等で発掘した史料を素に、事件の謎 解明について解説されている。

以上